



 横浜市歴史博物館

「かやぶき屋根プロジェクト」シンポジウム 「かや」の活用とこれから

横浜市歴史博物館では、隣接する大塚・歳勝土遺跡公園内に
復元している弥生時代の茅葺建物の日常的な修繕を、
市民ボランティアの皆さんと楽しみながら学び・行う
「かやぶき屋根プロジェクト」を立ちあげ、実施しています。
このシンポジウムでは、「かや」を活用している団体が、
それぞれどのような考え方をもって活動をしているのかを
知る機会として開催するものです。
各団体の活動報告と討論をとおして、「かや」の活用に関する
展望や方向性について検討したいと考えています。

プ
ロ
グ
ラ
ム

- 事例報告 1 「かやぶき屋根プロジェクト」の活動について
——横浜市歴史博物館 橋口豊
- 事例報告 2 「田舎モダン茅葺ステーション」
20年間空き家だったコミュニティスペース活用の今
——古民家ガーデン紋蔵 志澤晴彦氏
- 事例報告 3 われらが紡ぐ 白川郷かややねプロジェクト
——公益財団法人日本ナショナルトラスト 出口美智子氏
- 事例報告 4 ふるさと文化財の森「朝霧高原 茅場」と
「朝霧高原活性化委員会」の活動報告
——「朝霧高原活性化委員会」メンバー・
NPO法人 富士山麓観光まちづくり研究所 岸野正美氏
- 討論 「かや」の活用とこれから・意見交換 発表者全員

なお、本シンポジウムは新型コロナウイルス感染拡大防止対策のため、動画配信という形式を取ります。

横浜市歴史博物館 YouTubeチャンネルにて2月下旬 配信予定!

https://www.youtube.com/channel/UCjPHB5GHLU9o_ih5V1kOaw



 **文部科学省** かやぶき屋根プロジェクトは文化庁令和2年度「ふるさと文化財の森システム推進事業普及啓発事業」として実施しています。



写真提供：公益財団法人日本ナショナルトラスト

写真提供：公益財団法人日本ナショナルトラスト

「かやぶき屋根プロジェクト」の活動について

横浜市歴史博物館 橋口 豊

1.はじめに

令和 2(2020)年 12 月 17 日、国連教育科学文化機関ユネスコが、茅葺と茅採取を「伝統建築工匠の技 木造建築を受け継ぐための伝統技術」の要素のひとつとして無形文化遺産に登録決定しました。茅や茅葺屋根の保存・活用に追い風が吹く形となり、魅力あるコンテンツの提供の必要性をさらに強く感じています。翻って、令和 2(2020)年 2 月から日本でも猛威をふるい続けている新型コロナウイルス感染症によって思うような活動ができない状況が続いています。

本稿では横浜市歴史博物館の「かやぶき屋根プロジェクト」の概要を報告するとともに、現状どのようなことができるのかについても触れようと思います。

2.活動にいたる経緯

国指定史跡大塚・歳勝土遺跡は神奈川県横浜市都筑区に所在する弥生時代中期後葉の集落と墓域です。現在は大塚・歳勝土遺跡公園として保存・整備されています。集落跡である大塚遺跡内には竪穴住居 7 棟、高床建物 1 棟が復元されており、いずれも屋根材には茅(ススキ)が使用されています。

茅葺屋根の建物は人がその場に生活して手入れを続けることで長持ちしますが、大塚遺跡の復元建物は屋外展示資料であり、人が生活しているものではありません。よって、日差しによる紫外線や風雨、落ち葉による影響を受けやすく、これまで大塚遺跡内の復元建物の長期運用のために取っていた手段は、年 1 回の薬剤による殺虫でした。建物内で焚火などによる定期的な煙燻蒸を実施できれば、茅葺屋根はより長持ちすると考えられますが、火災や火傷のリスクがあり実施にいたっていません。

そこで、可能な範囲で茅葺屋根の劣化を食い止めるため、またより多くの人々が楽しみ・学びながら活動できる場を創出するために、以下のとおり目標を立て、「かやぶき屋根プロジェクト」を立ち上げて平成 29(2017)年より、活動を始めました。

- ①茅葺屋根職人に教えを請い、自分たちでも簡易な修繕を実施できる技術の獲得。
- ②素材となる茅の確保と活用。
- ③上記 2 点について、将来的に公募によるボランティアとともに継続して実施する。



大塚遺跡の復元建物



3.活動の概要

「かやぶき屋根プロジェクト」の実施にあたっては、平成 28(2016)年に朝霧高原活性化委員会と知己を得たことから、大塚遺跡の復元建物の修繕に、朝霧高原の茅(ススキ)を使用させていただくことになりました。年度をひと区切りとして半年間程度の活動を続けてきました。年間 2 回程度の朝霧高原茅場での茅刈りと月 1 回程度の大塚・歳勝土遺跡公園での軽微な修繕を基本的な活動としています。そして必要に応じて茅葺屋根職人による実地での講座や参加者による報告会、パンフレットを作成しての広報活動などを実施してきました。また、朝霧高原茅場が文化庁の「ふるさと文化財の森」登録地であったこともあり、文化庁事業「ふるさと文化財の森システム推進事業 普及啓発事業」として文化庁と委託契約を結び、活動しています。

では「かやぶき屋根プロジェクト」で行うことができる軽微な修繕とはどのようなものでしょうか。

- (1)経年や日差し、風雨によって緩んだ茅を叩き込むこと
- (2)劣化した茅を新しいものに交換すること
- (3)復元建物の清掃(落ち葉掃き)

の、3 つとなります。(1)は屋根に向かって雁木(がんぎ)という道具を叩き込むことで外に出てきた茅を押し戻して屋根を詰めていくことでより長持ちします。雁木には柄が長かったり平べったかったり色々な形のものがあります。

(2)は茅葺屋根が一部腐ってしまったり、抜けてなくなってしまうに、差し茅を用いて新たに茅を追加することで部分的に直していきます。

(3)、屋根に堆積した落ち葉や木の実の除去も重要です。放置しておくと茅葺屋根の腐食が進みます。

このほか、必要に応じて茅葺屋根職人を講師としてお招きして職人技を見学させていただいたり、自分たちの活動を振り返った報告会を行ったり、今回のように茅や茅葺屋根を活動している他団体の皆さんと共に活動したりしています。



左上:雁木による茅の叩き込み

右上:差し茅による部分修繕

左下:落ち葉掃除

右下:活動報告会の様子

4. ボランティアの募集と参加

「かやぶき屋根プロジェクト」の協力者としてボランティアの公募を令和元(2019)年より始めました。横浜市歴史博物館のHPとチラシを使い、年度内は特に期限を設けず募集を行っています。

令和3(2021)年2月現在、「かやぶき屋根プロジェクト」にご協力頂いているボランティアは15名。月1回の活動ごとに参加者を募り、毎回5人程度のボランティアさんに参加いただいています。活動終了後は当日の振り返りもかねて、簡易なものです。報告を作成し、参加者・不参加者を含めてボランティア全員へ送付しています。

朝霧高原茅場での茅刈りにおいても当然ながらボランティアさんの協力をいただいています。初めて茅刈りをされるボランティアの方には朝霧高原茅場で茅を刈ることができる証「茅刈り人」になるための研修を実地で受けてもらい、次回から茅刈りにご参加いただいています(研修は朝霧高原活性化委員会が実施)。



左:ボランティア募集チラシ

右:茅刈り研修の様子

5. コロナ禍で何ができるのか

朝霧高原茅場は朝霧高原活性化委員会を中心に、年間を通じて茅場の維持・活用が進められています。「かやぶき屋根プロジェクト」における令和2年度の活動は、当初朝霧高原茅場で毎年4月に行われる野焼きに参加するのを皮切りに、年間をつうじて茅の特性についてより深く学ぼうと計画していました。しかし、新型コロナウイルス感染症の世界的流行に伴い4月7日に発出された緊急事態宣言により活動延期を余儀なくされました。令和2年度の活動は、屋外が中心ということでおよそ半年後の9月から開始したものの、令和3年1月7日より再発出された緊急事態宣言の影響で中止・縮小を余儀なくされています。

コロナ禍で活動が制限された中、「かやぶき屋根プロジェクト」では、令和3年1月31日大塚遺跡の復元建物1棟の清掃を実施しました。参加者は筆者のみでしたが、その様子を動画で撮影し、横浜市歴史博物館のYouTubeチャンネルに「復元竪穴住居清掃の様子(タイムラプス動画)」というタイトルで公開しました(<https://www.youtube.com/watch?v=Y5ik3iA8qhA>)。「かやぶき屋根プロジェクト」が縮小傾向ながら実施していること、文字や写真では分からないより具体的な活動報告を行うためなどの目的で実施しました。ボランティアさんへは

前述した活動報告内でその旨を連絡し、動画を視聴してもらいました。およそ1時間の活動を1分弱に縮めて作成することで視聴の負担にならないよう心掛けたものの、何人かのボランティアさんより、編集方法についてご意見をいただきました。動画をつうじてボランティアさんと双方向の意見交換ができた点、非常に興味深く、コロナ禍における今後の活動のひとつのヒントになるのではないかと考えています。

6.おわりに

今回は大きく3点、報告しました。「かやぶき屋根プロジェクト」の活動概要・ボランティアさんの協力・コロナ禍での活動内容になります。特に3つ目についてはシンポジウムのタイトルである『「かや」の活用とこれから』のこれからと大いに関係があります。シンポジウムの討論で多くのこれからやそのヒントを見つけることができればと期待しています。

「田舎モダン茅葺ステーション」 20年間空き家だったコミュニティスペース活用の今

古民家ガーデン紋蔵 志澤 晴彦

○古民家ガーデン紋蔵(神奈川県足柄上郡開成町金井島 1294)は、2013年4月よりNPO法人すずろ(島山光子理事長)が高齢者と児童デイサービスを福祉事業体が住み込み管理人1名を置き、現在に至ります。

○2021年2月現在の運営状況と展望について

①NPO法人すずろ笑和工房(B型作業所製品販売)・観光ガイド(県の未病コンシェルジュ)



②ファイバーリサイクルネット・古物商・4R

○FRN・「ファイバーリサイクルネットワーク」の足柄支部として衣類をゴミにしない活動を行っています。洋服を含む衣類の回収と着物(和装・和小物)。

4R=リメイク・リユース・リサイクル・リバイバルシーンの創出

○古物商免許を取得済

○FRN は横浜に本部があり県内 16 支部で衣類回収やリサイクル着物フェアの開催などを行ってきました(1992年設立)。



ファッションショー出演
隣にある開成町指定文化財
あしがり郷瀬戸屋敷秋の市

③人力車(2台)の車庫、茅葺文化・観光広報ステーション

○浅草・箱根で経験を積んだ人力車夫「かいふく」さんの人力車2台の車庫になっており、開成町のひなまつりや、あじさい祭りの際の運行アトラクションを目指しています。

○人力車の車夫は、茅刈り人にも登録参加し、茅葺職人さんの仕事も受けて葺き替え補修工事の際も尽力していただきました。

○近隣の茅葺屋根のメンテナンス情報にアンテナを張って若い茅葺職人さん達の仕事を掘り起こす一助になる場所として、さらに全国や世界の茅葺屋根の情報も SNS を使いキャッチして案内できるように、茅葺文化・茅葺観光の広報ステーションを目指します。

○グーグルのローカルガイドをしています。



クルマ好きの方へのイベント貸し出しでも利用がありました。



④「きもの de ドレス」美容師グループと協働事業・和文化生きがい発信

○「田舎モダン」茅葺田園スタジオでの、プロの美容師グループによる人生の節目の思い出づくり・着付け・撮影サービスの提供(有料)



To be continued...



公益財団法人日本ナショナルトラスト 出口美智子

公益財団法人日本ナショナルトラストについて

公益財団法人日本ナショナルトラスト（以下、「JNT」）は、英国の環境保護団体である「ザ・ナショナルトラスト（The National Trust）」をモデルに、1968年12月に「財団法人観光資源保護財団」として設立されました。1992年9月には名称を「財団法人日本ナショナルトラスト」とし、その後公益法人改革により2012年4月に「公益財団法人日本ナショナルトラスト」となりました。

JNTは、地域の大切な資源である文化・自然遺産を「守る」「伝える」「つなぐ」ことで、日本のすぐれた文化財や自然の風景地などを保全し、利活用しながら次の世代につなげていくことを目的に活動している団体です。

「守る」活動として、全国300件以上の調査事業のほか、東京都指定名勝 旧安田楠雄邸庭園（東京都文京区）、京都市指定有形文化財 駒井家住宅（京都府京都市）、北茨城市指定史跡 天心遺跡記念公園（茨城県北茨城市）などを保護資産として取得・管理し、公開や活用を進めています。

「伝える」活動として、JNT保護資産や関連地域の活動を会報やHP、メールマガジンなどでお知らせしています。また、JNTの保護資産では、その魅力を伝えるためにそれぞれの特徴を活かしたイベントを開催しています。

そして、「つなぐ」活動では、地域遺産支援プログラムに取り組んでいます。地域にとって大切で次世代に伝えていくべき地域遺産に新たな光を当て、活かす取り組みを行うことで、人々がさまざまなかたちで地域遺産に携わり、営みが生まれ、地域の豊かさにつながる。このような循環が生まれる環境や仕組みをつくることを目指すことが、「地域遺産支援プログラム」です。現在は事業化に向けて、2つの地域でモデル事業を実施しています。

われらが紡ぐ白川郷かややねプロジェクト発足のきっかけ

「われらが紡ぐ白川郷かややねプロジェクト」は、地域遺産支援プログラムのモデル事業の1つで、2015年度に発足しました。岐阜県白川村に2軒の合掌造民家を所有するJNTは白川村と長いお付き合いをさせていただいており、その中で、白川村内で合掌造民家の屋根材となる茅の循環を促し、自給率を向上させる取り組みを行っていることを知りました。この取り組みのポイントは、茅の自給に欠かせない刈り手の確保です。そこで、白川村と役割分担しながら、JNTが他地域の一般参加者を募り、茅刈りをイベント形式で行うプロジェクトを協働で立ち上げました。イベントは「われらが紡ぐ白川郷かややねプロジェクト一秋の一斉茅刈り」として、毎年11月に開催しています。さらに、一般参加者には、茅刈りを通して村の文化に関心を持ち、できれば継続して関わってほしい、という思いから、東京を拠点に茅刈りイベントの企画をする「かややね会議」という場を設定しました。

秋の一斉茅刈りについて

茅刈りイベントである「秋の一斉茅刈り」は2016年に始まりました。このイベントは、主催が白川郷荻町集落の自然環境を守る会、共催は白川村、白川村教育委員会、白川郷合掌家屋保存組合、(一財)世界遺産白川郷合掌造り保存財団、JNTであり、多くの方にご協力いただき成り立っています。

参加者は年々増加傾向にあり、第一回の参加者は白川村内・白川村外の参加者が約50名でしたが、2019年には白川村内から35名、白川村外から47名、合計82名の参加者で、茅刈りを実施しました。

茅刈りイベントを継続して実施することにより、毎年参加してくださる方もいます。その方たちは、白川村の茅場で過ごす時間や、白川村の方や他の一般参加者との触れ合いを楽しみに参加して下さいます。また、社会貢献の機会として企業から数十名での参加や、とある学校の学生さんと先生が白川村の合掌造民家に関心を持ち、参加して下さったこともあります。茅刈りイベントは多くの方にとって、それぞれの意義を持ち、貴重な機会の場となっています。

茅刈りイベントの特徴は、茅刈り翌日にも企画を実施する点で、毎年異なる企画を作る場が「かややね会議」です。



かややね会議の活動内容

「かややね会議」は年に6回程度開催し、茅刈り翌日に行う企画を作り上げていきます。固定したメンバーはおらず、毎回どなたでも参加していただけます。これまで、建築や演劇、自然、商業、社会活動等をテーマに仕事をする方々や、学生の皆さんの参加がありました。かややね会議の当日のテーマは、企画のアイデア出しの回や、企画を決定する回、企画の詳細を考える回など内容は様々で、その場に参加する人によって企画を作っていきます。これまでにかややね会議で企画し茅刈り翌日に実施したイベントをご紹介します。



・2016年 ミニ茅ニューづくり

白川村ではその昔、刈った茅を保存する方法として「茅ニュー」にする、ということを知りました。そこで、茅ニューのミニ版を作り、白川村を散策しながらお気に入りスポットでミニ茅ニューを撮影する企画を行いました。この取り組みは、今では作られなくなった茅ニューのミニ版を作る初めての取り組みとなりました。

・2017年 茅染め体験

白川村では草木染が行われていることもあり、かややね会議では茅でハンカチを染める茅染め体験を企画しました。事前準備として、かややね会議の場で茅染めの実験を行い、参加者の満足度を高めるためのプログラム作りを行いました。茅染め体験当日は、茅から出る綺麗な色をみて参加者の歓声があがり、賑やかに過ごしました。

・2018年 郷土芸能体験

茅刈りイベントではあまり接点のない白川村の子供たちと触れ合える機会を作りたいと考え、白川村の小学生に、郷土芸能「こだいじん」を習う企画を実施しました。教え方の上手な子供たちは、こだいじんの踊りだけではなく、白川村での暮らしや小学校で学んでいることを教えてくれました。参加者からは、「大きくなったこの子たちと今度は一緒に茅刈りをしたい」という声もありました。

・2019年 屋根組み体験

茅を刈った後、どのように屋根材として使われるのか理解を深めるため、合掌造民家の屋根組みを学ぶ企画を行いました。茅葺き職人さんに教えていただき、白川村の伝統的な縄の巻き方である「ハコマキ」、ネソ練り、ネソかけを体験しました。想像以上に力が必要であることを実感し、実際に白川村の屋根を何十年も維持している技術に触れられる貴重な機会でした。

このような毎年の企画以外にも、プロジェクト全体に関わることも参加者のアイデアで実施しています。例えば、本文のタイトルである「われらが紡ぐ白川郷かややねプロジェクト」のロゴは、かややね会議参加者の方に作成頂きました。また、参加者に繰り返し茅刈りに参加してもらい、参加者同士のコミュニケーションを図るため、茅刈り参加回数の分かる認定証を作成しました。認定証は名札付きのバッジで、名札の色で、その人が何回茅刈りに参加したのかが分かります。茅刈りに参加した人を「カヤカリスト」と称し、カヤカルーキー、カヤカリーダー、カヤカリスター、カヤカレジェンドと、参加毎に称号が変化する仕組みです。



かややね会議が目指すこと

かややね会議は、主に茅刈り翌日の企画を通して、茅や白川村の文化に関わる人や茅刈りイベントに継続的に参加する人の増加を目指し、活動しています。世界遺産として有名な白川村は、知れば知るほど、観光地という観点だけではなく、茅にまつわる文化の残る豊かな場所としての魅力があります。地域の外の人だからこそ気付くその魅力を入り口に、白川村の茅文化に出会う人を増やし、茅刈りイベントを継続させていくことは、茅文化の継承の一端を担えると考えています。白川村について新たな発見を積み重ねることで魅力が発信でき、さらにかややねプロジェクトに関わって下さる方が増えていくという循環を目指しています。

この循環を実現し、継続するには、今後もかややね会議が参加してくれる人のアイデアを大切に活かし、白川村

での茅刈りイベントにつなげる必要があります。様々な経験や価値観を持つ方々に参加していただくことで、白川村の魅力の発見や、その発信を積極的に行っていきます。また、これまで約5年間のかややね会議では、参加者から、茅にまつわる様々なアイデアが挙がっています。年に1度の白川村での茅刈りイベントであるため、出来る内容は限られていますが、かややね会議参加者のアイデアを実現するための場の設定も重要です。

最近はオンラインでの取り組みも進めやすくなっています。かややね会議のオンライン開催は、これまでかややね会議に参加してくれていた首都圏の若者だけではなく、白川村の皆さんや、過去の茅刈り参加者の皆さんにも、気軽に参加いただける機会です。今後とかややね会議だからできる白川村や茅文化の魅力発掘を基本とし、皆さんの力を集結して「われらが紡ぐ白川郷かややねプロジェクト」を進めてまいります。

ふるさと文化財の森「朝霧高原 茅場」と「朝霧高原活性化委員会」の活動報告

「朝霧高原活性化委員会」メンバー

NPO法人 富士山麓観光まちづくり研究所 岸野 正美

1.はじめに

「朝霧高原活性化委員会（以下活性化委員会とします。）」は、廃校となった「建設大学校静岡朝霧校」跡地に設立された職業訓練法人全国建設産業教育訓練協会「富士教育訓練センター」の開校 10 周年を記念し、同センターが CSR の一環として朝霧高原(猪之頭区、富士丘区、麓区、根原区の 4 区)の地域活性化をテーマに地域住民や地域の企業、NPO 法人等の団体に呼びかけ組織された団体です。

【注】活性化委員会の代表者は朝霧高原茅場所在地の根原区長が就任。

活性化委員会が地域の資源である茅（ススキ）や茅文化および茅葺建築などをテーマに取り組みをはじめた経緯は、2010 年当時の猪之頭区の区長さんはじめ有志のみなさんが、富士河口湖町「西湖いやしの里根場」の茅葺建築を視察見学され、旧「鱒の家」を修復し茅葺建築として残す方策はないかと委員会に提案されたことによります。

かつて、朝霧高原は「遠っ原三里（とおっばらさんり）」とも呼ばれ、山梨県との県境となる「根原（ねばら）」と「人穴（ひとあな）」の間は遮る木もない広大なススキやヨシの原が広がっていました。昔を知る元根原区長さんはススキを「青いうちはマグサ（秣、馬草）、穂が出るとススキ、屋根にのせるとカヤ（茅）」と呼び人々の暮らしと密接に結び付いていた様子を話されていましたが、戦後の高度経済成長とともに朝霧高原でも野焼きは継続されているもののススキの利用としては僅かにお茶栽培のマル材・肥料としての利用にとどまっていた。

毎年野焼きをする朝霧高原の茅場は、見る人に雄大な富士山の景観などを楽しませてくれるとともに、草原を好む動植物にとっては貴重な住みか・環境を提供していることなどもふまえ、委員会では提案を受け地域の資源である茅、茅文化および地域の茅葺き建築の継承をテーマとした活動に取り組むこととしました。



1964 年の「遠っ原三里」 富士山の全容が見える



同じ場所の現在 ススキ草原が森に遷移

具体的な目標としては、まず、①委員会のメンバーや地域住民が茅や茅文化および茅葺き建築について可能な限り共通する理解、認識をする必要があること。②朝霧高原の茅場から屋根材としての茅を生産・出荷する体制を確立すること。③旧鱒の家を含め地域に残る茅葺き建築物の現状と今後これらの建築物を保存、継承するための解決課題を把握すること。とし、そのための具体的な活動方針として以下の 3 点を定めました。

- ① 茅を屋根材として安定生産する体制づくりとブランド化
- ② 茅や茅場の持つ機能等に関する知識、情報の普及啓発
- ③ 茅場と朝霧高原の地域資源を活用した茅、茅文化の普及啓発と地域の活性化

2.活性化委員会の取組み

(A)「ふるさと文化財の森」設定と「茅葺きフォーラム」の開催

活動財源がない中で、具体的な目標と活動方針を踏まえた活動をどのように実施するのか検討を重ねた結果、第一段階として、文化庁の「ふるさと文化財の森」の設定を申請し、同制度による必要な支援を受けながら朝霧高原茅場の管理や良質な茅を安定的に生産し出荷するための環境整備を行うこととしました。幸い、富士宮市、富士宮市教育委員会のご支援とご協力を得、朝霧高原茅場は2012年3月「ふるさと文化財の森」に設定されました。

次に、目標達成の第二段階として茅場の所有者である富士宮市長（富士宮市根原区財産区管理者）に「茅葺きフォーラム（富士宮大会）」開催について要望し、市の全面的な協力を得て2013年5月25日に富士宮市、富士宮市教育委員会、日本茅葺き文化協会の共催による「第4回茅葺きフォーラム」と翌26日に近隣の茅葺き建築等の見学会を実施しました。



「第4回茅葺きフォーラム」富士宮市民会館



見学会 井出館(富士宮市文化財)

(B) 東京農業大学 エクステンションセンター オープンカレッジとの連携

東京農業大学では、エクステンションセンター「オープンカレッジ」として「参加協働型講座」を開設し、農大富士農場のある麓地区を中心に朝霧高原一帯をフィールドに、地域の人びとと共に体験し、ともに学び、共に考え、共に行動することで地域づくりを実践し、地域の様々な目標を実現しようとする取組を行っています。

活性化委員会のメンバーとして参加協働型講座を担当する東京農業大学 木村悦之先生が参加されていることから、2012年5月の講座から現在まで朝霧高原の地域資源である茅をテーマとした講座やワークショップなど、委員会活動と連携した取り組みを講座の一環として実施いただいております。



「オープンカレッジ」茅葺古民家 MAP づくり



ススキ ミミズクづくり

(C) 委託事業、各種助成事業の実施

① 文化庁事業「ふるさと文化財の森システム推進事業」普及啓発事業の実施

2013 年から文化庁事業「ふるさと文化財の森システム推進事業」普及啓発事業の企画提案を申請し、現在まで 4 回企画提案が採用され朝霧高原茅場の維持保全と茅葺技能の継承等をはかるための普及啓発事業を実施しております。



茅刈り講座



茅葺き講座

② 朝霧ビバレッジ(株)の助成事業



自然観察会(植物)



各種冊子

2016年から富士山の銘水(株)、粟井英朗環境財団、並びにグループ会社の朝霧ビバレッジ(株)の助成を受け、茅場の持つ多様な機能や自然環境等について普及啓発するため、朝霧草原の植物、蝶、地質等の観察会や草原修復等の各種無料セミナーの開催や各種冊子の無償配布を行っています。

③ 朝霧草原茅場内の茅保管倉庫整備事業

朝霧高原茅場内にある旧牛舎を改修し茅保管倉庫として活用するため、2014年にトヨタ自動車の助成を受け、屋根面積の30%を改修し茅の保管を開始しました。茅の保管量の増加に伴い2019年からパルシステム生活協同組合連合会「地域づくり基金」助成金事業に採択され、旧牛舎の残り70%の屋根面積の補修を順次行い、茅の保管場所以外の空きスペースをイベント等多目的に活用できる施設に改修する事業をすすめています。



茅倉庫 内部



茅倉庫外観と助成銘板

3.今後の活動について

当委員会では、引き続き地域資源である朝霧高原茅場をテーマに、文化財建造物の資材供給の場所としての機能強化を図るとともに、茅場の持つ多様な機能について普及啓発するため、体験学習、環境教育等のフィールドとして活用するとともに、イベント参加者や茅葺建築所有者等との交流により新たな取り組みが生まれることや、地域住民の生きがい創出とともに地域の活性化に繋がりたいと考えております。

かやぶき屋根プロジェクトシンポジウム資料

令和3(2021)年3月1日発行

編集・発行 (公財)横浜市ふるさと歴史財団 横浜市歴史博物館

〒224-0003 横浜市都筑区中川中央 1-18-1

TEL 045-912-7777

表紙デザイン やなぎ堂